IPPNW 総会に参加して

岩永洋

この度は、IPPNW 総会に参加する機会を与えていただき誠に感謝しております。元々、核兵器廃絶を目指す立場から、細々と言論活動をしてまいりましたが、今回のように多くの志を同じくする人達との話す事ができ色々と考えさせられました。これらを通じて考えたこと、感じたことを少々書かせていただきたく存じます。

まず、国別の違いについて少々。多くの参加者が可及的速やかな核廃絶を希求するなか、米国のケネディ女史は我々の世代での廃絶は無理だろうという見解をみせており、いくらかの温度差は感じられました。また、発表は無かったものの北朝鮮からの参加者がいたのにも驚きました。恐らく、彼らは反核兵器活動の状況を視察しに来ただけで特に廃絶など目指してはいないと思いますが、この情報が北朝鮮に伝わることで、ほんのわずかでも核開発や他国への核開発支援を躊躇する材料になれば無駄ではないと思います。会場では、これら少々の意見の差異があっても喧嘩にならず、大人な対応をしていると感心しました。

次に疫学データなどについては、ヨーロッパでは放射線障害により循環器系の障害を惹起せしめたと疑わせるデータや、個人的に聞いた話ではウイグルの被曝ではなぜか甲状腺癌の増加が少ないなどの話もあり、興味深いものがありました。様々なデータを多角的に解析できれば、世界中に多数いて何の補償も受けられていない被曝者ら救済の一助にもなると思います。地道なデータの集積や解析をされている先生方には頭が下がる思いです。

最後に、軍事的知識に乏しい参加者が多いのは問題があると思います。我々が廃絶を目指しているのは間違いなく、地球上で最強の兵器であり、それを用いた戦略や政略の特性を把握していないと廃絶は困難であると思われます。例えばオバマ大統領がただ単に善意で核廃絶を訴えていると本気で信じている人が多くいるようですが、実際には過剰な核兵器の維持経費や、通常兵器の高度化、核拡散によるテロへの脅威などを考えての方向性だと思います。世界的な視点でも考えているでしょうが、あくまでも根本はアメリカ合衆国の利益です。核廃絶がアメリカの利益にならないと判断すればすぐにでも翻意するでしょう。同じことは他の核保有国にも言えます。中国がいまだに核拡散を促進し続けるのは、それが国益にかなうからに他なりません。特にミャンマーの衛星国化と同国軍事政権の核武装化は中国にとって多くの領土問題を抱える東南アジアと南アジアへの睨みを効かせるばかりでは無く、いわゆる第一列島線を突破せずともインド洋から外洋への出口を引いてはシーレーンを確保する意味で重要なのです。

私、来年は長崎に帰郷しますので、これまでよりは活動ができるようになると思います。またお会いする機会がありましたら、よろしくお願い申し上げます。